



第6学年 外国語科 Let's go to Italy.

目標 日本のよさをより知ってもらうために、自分が行ってみたい国や相手におすすめの地域とその理由について、伝えようとする内容を整理した上で話したり、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いて書いたりすることができる。



授業者
6年生担任
ALT
中学校英語教諭

単元を描く

外国語活動および外国語科では、**コミュニケーションを図る素地、基礎となる資質・能力を「言語活動を通して」育成すること**を目標としています。

その言語活動は、児童にとって「話したい!」と思えるようなものであり、「何をどのように話そうかな」と思考できるものでなければなりません。

そこで、右の5つの視点をもとに、**コミュニケーションを行う目的、場面、状況が明確な単元ゴールの言語活動**について検討しました。

教科書では...

旅行代理店の店長になって、相手の興味に合ったおすすめの国を紹介する活動

結婚して、異動した先生におすすめの新婚旅行先を紹介する活動

ALTが外国に行きたいので、いろいろな場所を紹介する活動

学校の先生たちに、おすすめの国の旅行プランを紹介する活動

ALTに日本でおすすめの県を紹介する活動

グループ協議で出た案

単元ゴールの言語活動について検討する視点

- ☑ 児童が**興味・関心**をもつ身近な題材か。
- ☑ **相手意識**をもつことができるか。
- ☑ 話したり聞いたりする**必然性**があるか。
- ☑ より**本物**に近い活動か。
- ☑ **コミュニケーションの楽しさや意義**を感じられるか。

協議では、下のような疑問点も出されました。



教科書では、5年生で身近な国内のことを扱い、6年生で世界に目が向くように構成されている。ゴールで国内を紹介する活動でよいのだろうか。

教材研究会

授業研究会

単元ゴールの言語活動

オーストラリアに帰るパトリック先生に、日本のよさをより知ってもらうために、おすすめの観光スポットとその理由などを紹介する。

低学年の頃お世話になったALT



ALTに「最後に日本を堪能して帰りたい。どこかおすすめはないかな?」と依頼してもらおう。

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
単元構成	自分が行きたい外国について話す活動			ALTにおすすめする日本の地域について話す活動				

単元づくりの Re-Design

相手にとって外国である日本を紹介するために、まずは自分なら外国のどんなところに行きたいか話すことで、相手のニーズを聞き出す必要性や、日本らしい場所を紹介したい気持ちを引き出すよう、単元構成を工夫し、国内の紹介をする意義をもたせました。

自分なら外国のどこに行きたいかな?



ALTは何をしたいのかな?

最後に日本らしさを感じて帰ってもらいたいね。

本時を描く

本時(7/8時)の目標
日本のよさが伝わるように、おすすめの観光スポットについて伝えたい内容を整理した上で話すことができる。

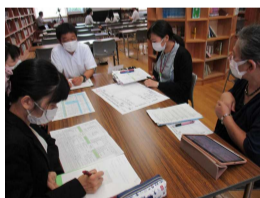


本時で目指す児童の姿

- ☆ALTのニーズを再確認し、内容や伝える順序を再構築する姿
- ☆友達の発表のよさや聞き手の反応から、自分の発表内容を再構築する姿
- ☆既習の表現を使って加えたい内容を表現できないか思考する姿

参加者の声

- ◎意欲があり、発話量が多い。
- ◎友達の発表を取り入れて、すぐに話することができていた。
- ◎「自分のこと」「伝え方」「感想」と子供の意見を分類して板書していたので、指導していることが分かった。



小筑紫小: 本時の工夫点

- ★ALTからの動画を視聴させ、相手のニーズと自分の発表内容とを照らし合わせることで、内容を見直させる。
- ★相手のニーズに合っていないことを紹介しようとしている児童には、日本らしさを感じて欲しいという自分の考えをもとに、内容の追加や話す順序変更の必要性に気付かせる。
- ★相手意識をもって発表している児童を取り上げることで、自分にも取り入れられないか思考させる。
- ★授業の始めと終わりにパートナー(固定のペア)で発表し合うことで、変容に気付かせる。

- 相手のニーズを意識させるための手立てが必要。
- モデルで変容に気付かせる。
- 発表内容を取り上げてニーズに合っているか確認する。
- ALTにも内容について指導を入れてもらう。
- 加えたい内容をICT端末でマッピングさせる時間が必要。

研究協議

講師による指導・助言

講師: 文部科学省初等中等教育局
直山 木綿子 視学官

今回は、リモートで、ご指導をいただきました。



Point 1 中間指導の在り方

内容について 子供同士のやり取りの中で、表現を変容させるためには、「聞き手」がカギ

- 「聞き手」から質問を受けることで、「話し手」は初めて内容を変えなくてはいけないことに気付きます。中間指導では、「友達に何と質問され、どのように内容を変えたのか」を取り上げて共有することで、全員の学びにしていきたいと思います。

表現について 学習過程(Do-Learn-Do again)を子供たち自身が進められるようにすることが大切

- 「Do」では、まずやってみて「言えない」「分からない」ことを自覚させる場を設定することが必要です。また、「Learn」では、新しい表現を練習する場面において、子供に「練習したい」と言わせていくようにします。教師主導ではなく、子供自身が学びを推し進められるように場の設定や発問を工夫していきたいと思います。

Point 2 「他教科」の指導との関連

小筑紫小の子供たちは、英語を聞く力が付いていると感じました。

子供は、急に外国語で話を聞けるようになる訳ではありません。先生方が、1年生の時から「日本語できちんと話を聞かせること」、2年生、3年生...と「友達の考えをしっかりと聞いたうえで自分の考えを再構築させること」を積み重ねてきたことで、力を付けてきているはずで、他教科との関連を図り、日本語を育てることが外国語の力につながります。

Point 3 GIGA スクール構想のもとでの一人一台端末の効果的活用

- ICTの強み
- ① 多様で大量な情報を取り扱うことができる
 - ② 時間の制約を超えることができる
 - ③ 空間的な制約を超えることができる



ツールとして、文房具のように使っていきたい!

例【ジャムボード】の活用

	活用の目的	使い方	効果
②	振り返りの蓄積	思考ツール(座標軸、Xチャートなど)を貼り付け、相手のニーズ別の観点で、できるようになったことを毎時間色分けして分類する	足りなかったことや次時にしたいことが視覚化される
③	マッピングで内容の追加	やり取りをした友達や教師からのフィードバックとして、本人以外も言っていた内容を加える。	本人が気付いていない内容も追加され、正確に整理される